



# 日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第25号 (2018年10月1日) / Núm. 25 (1 de octubre, 2018)

## 事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1  
第2ユニオンビル4F  
㈱ガリレオ 学会業務情報化センター内  
Tel:03-5981-9824 Fax:03-5981-9852  
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp  
(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

## 広報委員会編集部

〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉1-4-1  
神田外語大学外国語学部  
イペロアメリカ言語学科  
青砥清一宛  
Tel:043-273-1344 (内線)  
e-mail: aoto1230@kanda.kuis.ac.jp

## 目次

### 【巻頭言】

斎藤文子 「学会の過去を掘り起こす」 ..... 2

### 【エッセイ】

1. 清水憲男 「セルバンテスのアルジェリア体験を辿る」 ..... 3
2. 青砥清一 「パラグアイのバイリンガリズムと言語的多様性について」 ..... 5

### 【書評】

1. 花方寿行 久野量一  
『島の「重さ」をめぐる——キューバの文学を読む』 ..... 6
2. 大楠栄三 花方寿行  
『我らが大地—19世紀イスパノアメリカ文学における  
ナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写—』 7
3. 大原志麻 M<sup>a</sup> Isabel del Val Valdivieso (ed.), *El agua en el imaginario medieval. Los reinos ibéricos en la Baja Edad Media* ..... 9
4. 松井健吾 浅香武和『新西語事始め』 ..... 11

### 【国際学会報告】

木村琢也・泉水浩隆 VII Congreso Internacional de Fonética Experimental  
(CIFE 2017) (第7回スペイン国際実験音声学会議) ..... 12

【新刊案内】(2017.6~2018.5) ..... 14

【『HISPÁNICA』編集委員より】 ..... 16

【編集後記】 ..... 16

## 【巻頭言】

### 「学会の過去を掘り起こす」

斎藤 文子

先頃、本学会の会員の方から、過去の大会プログラムを知りたいのだが、学会のホームページには2002年以降のものしか掲載されていない、その前のものはどこで見ることができるのか、という問い合わせをいただきました。

機関誌 *HISPÁNICA* については、ホームページにこれまでの目次がすべて挙がっていますし、ここを經由して J-STAGE にアクセスすれば、1956年の創刊号から掲載論文をダウンロードできます（ちなみに J-STAGE とは、国立研究開発法人科学技術振興機構 JST が構築している電子ジャーナル出版プラットフォームで、国内の主要な学術誌を電子化して公開しています）。しかし大会に関しては、学会活動の重要な柱のひとつであるにもかかわらず、そのプログラムはここ数十年分しか載っていません。それ以前のものは何年にどこの大学で開催されたのかの記録さえありません。60年余りにわたる本学会の活動の歴史は、すなわち日本におけるスペイン語圏の言語、文学、そしてスペイン語教育研究の進展の歴史です。学会の大会は、限られた数の論文しか載せられない *HISPÁNICA* よりも、わが国の研究動向をより忠実に反映する鏡になっていると言えるでしょう。誰がいつどのような報告をしたのか、どんなテーマでパネルが組まれたのか、海外からどんな研究者が招かれ、講演をしたのか。それだけでなく、プログラムを見れば、自分が参加した大会のことがまざまざと蘇ってくるはずです。機関誌だけでなく、大会プログラムも過去に遡って誰でも見るようにすべきではないのか。

そこで理事の方々に呼びかけて、2002年以前の大会の記録がどこにあるかを調べていただいたところ、次のようなことがわかりました。第1回大会（1955年）から第6回大会（1960年）までの発表者と発表題目は、*HISPÁNICA* 6号の巻末にまとめて記載され、第7回から第12回まではそれぞれ *HISPÁNICA* 7号から12号に載っています。また、あるときまでは歴代会長に引き継がれていた段ボール箱のなかに、全部ではないのですが、大会プログラムが保存されていることも判明しました。この段ボール箱は、学会に関わる過去の資料が詰め込まれたいわば学会タイムカプセルで、『会報』19号（2012年9月）で当時会長の野谷文昭先生が「パンドラの箱」と名付け、おそろおそろ開けてみたときのことをつぶさにお書きになっておられます（どういうわけか、その後は、ある理事の研究室に置かれたままになっていました）。私自身も自分の研究室で探してみたところ、初めて学会に参加した1987年以降のプログラムが、欠けている年はあるものの、残っているのを発見しました。

というわけで、2002年以前の大会プログラムも、理事会が集めることができた分はPDFなどの形で、近いうちに学会ホームページで公開することにいたしました。興味のある方は、どうぞご活用ください。欠落している年度の分は、学会会員の皆さんのご協力を仰いで、埋めていきたいと考えています。

さて、ある会員の方の問い合わせがきっかけで、こうして過去の掘り起こしを始めることになったのですが、その過程で、第1回大会についても確認することができました。記念すべき創立大会が開催されたのは1955年12月4日、会場は当時北区西ヶ原にあった東京外国語大学。本年2月に急逝された原誠先生が『会報』2号（2001年6月）、3号（2001年12月）、4号（2002年6月）に「創設当時の思い出」を連載でご寄稿くださり、そのときの様子を、

受付係という立場から（そのとき先生はまだ学生でいらしたのです）、生き生きと書いておられます。お人柄が滲みでるこのエッセイをご記憶の方もいらっしゃると思いますが、ここで先生を偲びつつ、戦後 10 年目に開催された第 1 回大会に関する部分を少しだけ紹介させていただきます。

大会には 44 名の参加者があり、年会費は 1000 円でした（その会費が払えず 200 円しか渡さなかった方もいらしたそうです）。午前中の総会のあと、学食でカレーライスを食べながら、全員が自己紹介をし、午後から 3 名の研究発表がありました。町田俊昭氏の「現代スペイン語における与格の機能について」、大島正氏の「ベルナル・ディアスとメキシコ征服」、そして会田由氏の「ロマンセについて」。また原先生によれば、創立当初は研究発表希望者が少なく、その対策として質疑応答をやめたらどうかという、驚くべき案が理事会で議され、それを受けてしばらくの間、質疑応答禁止が学会の不文律になっていたそうです。学会草創期については山田善郎先生も別の視点から、『会報』5号（2003年1月）の巻頭言で思い起こしておられます。このような貴重なエッセイや書評、新刊案内が載っている『会報』のバックナンバーも、いずれ過去に遡ってホームページで読めるようにすべきでしょう。

学会創立から今年で 64 年、還暦を優に過ぎました。現在の会員数は 400 名弱、当初の 44 名から大きく成長しました。この間の学会の歩みを、公開できる部分はホームページで閲覧できるようにし、ささやかながら、日本におけるスペイン語圏の人文科学研究の歴史を振り返ることができるようにしたいと考えています。

（さいとう・あやこ 東京大学教授、日本イスパニヤ学会会長）

## 【エッセイ 1】

### 「セルバンテスのアルジェリア体験を辿る」

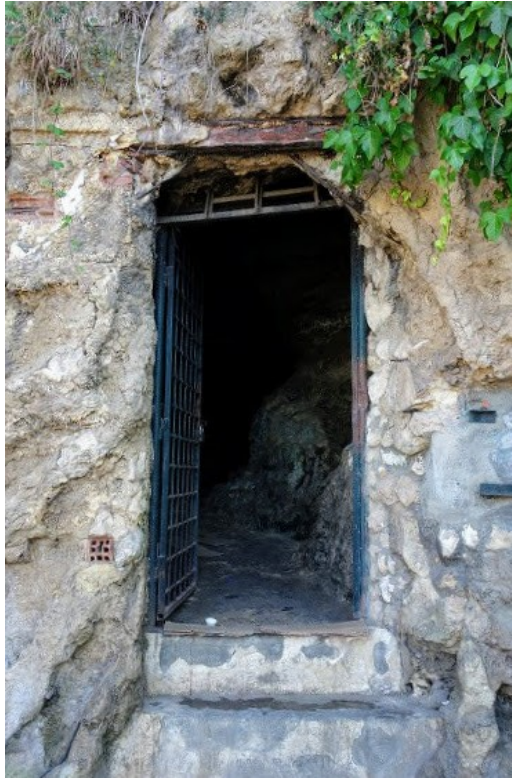
清水 憲男

6 月末、アルジェリアにお招きいただいた。西語圏諸国ではかなりの発表をさせていただいてきたが、西語圏外では 4 カ国目、イスラム圏への招待は初めてだった。それなりに緊張し、1 時間弱の講演準備に半年以上の時間を費やした。

アルジェリアは東京の Instituto Cervantes 館長として尽力された Antonio Gil 氏の新任地でもあり、今回も過分なお世話をいただいた。私は現地 Instituto Cervantes での講演を予想していたが、離日直前に国立図書館講堂が会場であることを知らされた。同国文化省高官とスペイン大使が冒頭挨拶、アルジェー大学教授 2 名が討議に加わり、行司役はチリの Adriana Lassel（ソルボンヌで学位）・・・これを聞かされたのは講演当日だった。狼狽する余裕もなかった。

Cervantes は 1575 年 9 月末から、比較的自由な捕虜として約 5 年間をアルジェリアで過ごす。私の発表は、今さらこの史実を説くものではなかった。Cervantes の同国滞在に関しては、2 つの文献が基本とされてきた。1) (*transc.*) Pedro Torres Lanzas, “Información de Miguel de Cervantes de lo que ha servido á S.M. y (...)”, *RABM*, 1905(書籍復刻あり)、2) (*atrib.*) Diego de Haedo, *Topographía e historia general de Argel* (...), Valladolid, 1612(英国で復刻)だ。後者は Cervantes と親交のあった Antonio de So[u]sa が著者 (G. Camamis 他)、Cervantes が

著者との立場（D. Eisenberg 他）もあるが、ここでは立ち入らない。



Cervantes が数ヶ月身を潜めたとされる洞窟入り口

史的背景を辿った上で、私は *El gallardo español*, *El trato de Argel*, *Los baños de Argel*, *La gran sultana* の 4 編の劇作品に見られる Cervantes のイスラムへの視座分析を試みた。内容はいずれ活字になろうし、「会報」の趣旨から離れるので、ここではアルジェリアにおけるスペイン研究について少しく触れたい。

討議に加わったのは、オスマン・トルコ史を専攻するトルコ語の権威 Dr. Chakib Benafri（スペインで約 10 年研究）と、前傾 *Topographia* (...)の研究をもって Barcelona 自治大学で学位を得た Dr. Salah M. Mounir で、話題は多岐に及んだ。apóstata, renegado, converso の相関、その史的環境と文学上の扱いのズレの問題などが、会場からの質問も含め、かなりの盛り上がりを見せた。翌日、2 人のご厚意で首都から離れた Cherchell に案内され、車中や地中海を望むレストランで昼食を楽しみながら意見を交しあった。深入りはできないが、2 人の話しを伺っていて、日本では converso や morisco の内実が十分に深化されないまま、呼称が独り歩きしているのではなかろうか、との思いをふと懐いた。

Dr. Mounir のツテで、Cherchell に残る morisco の家を見られたのは望外だった。最高の案内役 Dr. Benafri の、古代ローマから 18 世紀にいたる歴史論を伺って、邦訳の多い F. ブローデルでさえトルコ語の文献を駆使しておらず、西欧研究者がトルコ語文典を引用しても、誤読が

多いとの興味深い指摘も聞くことができた。

興味深いといえば、アルジェリアにはスペイン研究の学会組織がない。悪く言えば、各自が勝手に研究をしている。だが 1541 年の Carlos V, Hernán Cortés の同国遠征、独立後に敵の言語たるフランス語への反発から、とりわけ西部の漁村で西語が話されたなどでも分かるように両国の関係は密で、最近退職した Orán 大学の Ahmed Abi-Ayad 教授の仕事を見ても、決してレベルを侮ってはならない。学术交流も盛んで、とりわけ故 M. de Epalza を総師としてイスラム研究を進めてきた Alicante 大 (学術誌 *Sharq Al-Andalus*)、Barcelona 自治大、Alcalá de Henares 大と論文を介した交流がある。Dr. Mounir は現在、Alfonso X の *General Estoria* 第 4 部に見られる稀少アラビア語とタマジグト (ベルベル語) 系の語彙、Ibn Arabi による Fray Luis de León の神秘思想への影響、Lope de Vega とイタリア、アルジェリア演劇との比較などの博士論文を指導中だ。

対象国の研究成果を追うに留まらず、己の視点をしかと提示する・・・この当然の姿勢が日本でどれだけ実践されているか、これはなによりも自戒としなくてはならない。本学会の幽霊会員でしかない私は、少なくとも自戒を繰り返す幽霊であり続けたい。いったん幽霊になってしまうと、幸い年を取らないらしい。

(しみず・のりお 上智大学名誉教授)

## 【エッセイ 2】

### 「パラグアイのバイリンガリズムと言語的多様性について」

青砥 清一

南米パラグアイでは、1992 年に公布された民主憲法においてスペイン語とグアラニー語の公用語化ならびに言語的多様性が明文化された。一地方に限られず全国レベルで公用語に指定されているアメリカ先住民語はパラグアイのグアラニー語のみである。その後、新憲法に基づき 1994 年にバイリンガル教育国家計画が始動し、2010 年には言語法の発布をみた。

主に都市部の日常会話で使用されるグアラニー語変種は、スペイン語との混成言語であり、グアラニー語で「混合物」を意味する「ジョパラ」(jopará) と呼ばれる。学校で教えられている規範的なグアラニー語は、17 世紀イエズス会の宣教師アントニオ・ルイス・デ・モンターヤにより編纂された文法書と辞書に由来するが、これまで著者の異なる 64 種ものテキストが乱立し、統一した正書法が定められていなかった。そのため、公文書は言語法に則り、専らスペイン語で書かれている。だが今年 8 月、ついに政府公認のグアラニー語公用文法 (Gramática Oficial de la Lengua Guaraní) がグアラニー語協会から発表された。今後は、言語法第 14 条・第 25 条に遵い、公文書や公共空間においてグアラニー語の表記が増えていくであろう。

パラグアイでは、2つの公用語のほかにも、主にトゥピ=グアラニー語族に属する先住民語がチャコ地方などにおいて話されている。2012 年に先住民を対象に実施された国勢調査によると、先住民約 11 万 7 千人のうち、ほぼ半分の 49.3% が先住民語を最も多く使用する。話者人口が 1 万人を超えるムブヤ語、パニ・タビテラン語、アワ語などがある一方、イシル・トラマホ語、グアナ語などは百人程度の話者しか現存せず、消滅の危機に瀕している。憲法お

よび言語法では文化遺産として言語的多様性の尊重が謳われているが、財源の乏しいパラグアイにおいて法の理念を十分に実現するのは困難である。

そのほかにも先住民社会には言語に起因する深刻な問題がある。上記の国勢調査によると、先住民児童の約4割が初等学校をわずか第2学年で中退し、15歳以上の先住民の37.6%が非識字者である。中退の主な原因は、そのくらいの年齢の子供たちが家計を助けるため農作業などの労働に従事するようになることのほか、公用語の習得のために第3学年辺りからスペイン語とグアラニー語による指導の割合が高まり、母語で教育を受ける機会が減少するためと考えられる。

パラグアイ政府はバイリンガル教育を推し進めているが、公用語としてのグアラニー語を普及させないがために学校で少数先住民諸語の使用が妨げられるのであれば、同化政策と実質的に変わらないこととなる。

言語法は、「先住民語の使用を促進および保証するための適切な方法を定める」(第1条第2号)と規定する。今後、先住民コミュニティー出身の教員を養成し、少なくとも初等教育課程の修了までは現地の先住民語で教育を受けられる態勢を早急に整えるべきであり、その方面においてJICAなどの国際協力機関による積極的な援助が待たれるところである。

(あおと・せいいち 神田外語大学准教授)

## 【書評 1】

久野量一『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』(松籟社、2018年)

花方 寿行

久野氏がカリブ海文学(本来は英語・フランス語作品も含まれる)を関心の軸に据えて長らく研究活動が続けていることは、本学会をはじめとする学会・研究会で氏の発表を聞いたことがある者はもちろん、『崖つぶち』や『コスタグアナ秘史』のような翻訳業績にまず接した者も、おそらく察していることだろう。本書はそんな氏が「キューバの文学」をめぐって書かれた、待望久しい研究単著である。

「キューバ文学」ではなく「キューバの文学」と記す(記さねばならない)複雑な事情は、本書で十分に紹介されている。キューバ革命とその後のカストロ体制の成立をきっかけに、キューバ国内にとどまるか亡命するか、とどまった場合体制寄りの作品を書く(そして体制により評価される)か、体制から距離を置き批判する作品を書く(その結果国内で発表の場を失ったり弾圧される)か、亡命する場合どの国(スペイン、アルゼンチン等々)を拠点とするか、反カストロ(とその後継)体制という姿勢で執筆を続けるか、居住地にかかわらずキューバ出身であることを1つのアイデンティティと考えその連携を模索するか…ビルヒニオ・ピニェーラやレイナルド・アレナス、エドモンド・デスノエスの作品・作家論から、革命およびカストロ体制と作家たちの関係についての最新研究の紹介、そしてアンソロジー編集にみられる「キューバ性」の新たな模索など、本書で論じられ紹介される事例からは、国家領域と、そしてしばしばその政治体制と結びつけて論じられてきた「国民文学」的な枠組みが、既に文学を論じる上で限界に達していることが伝わってくる。なお本書でも言及されているピニェーラの代表作『圧力とダイヤモンド』も昨年末に翻訳が出たが(山辺弦訳、水声社)、こちらも重要な訳業である。お忙しいとは思いますが久野氏にも、是非本書で紹介されて

いる未訳の「キューバの文学」も翻訳紹介していただきたい。

とにかく読みやすく分かりやすい書き方なので、初心者にも格好の入門書だろう。ただ難点をいえば、「肯定の詩学」「否定の詩学」、「コスモポリタニズム」「アメリカニズム」、「体制派」「反体制派」といった二項対立が、ニコラス・ギジェンやレサマ＝リマ、カルペンティエルといったカストロ体制下である程度活動を認められ権威として利用された作家たちとピニエーラらを、あまりにも「分かりやすく」二分するのに用いられてしまっているきらいがある。前者の作品や生涯の解釈にもそぐわないが、本書で論じられているピニエーラの短篇「落下」における人体の物体化は、氏が前者と結びつけるモダニズム美学に近いものであり（フランツ・ローの提唱した当初の「魔術的リアリズム」）、レサマ＝リマの『楽園』でも似たような人間の非＝人間化・物象化のテクニックは多用されている。氏自身、ゴンプロヴィッチとの関係を論ずる箇所、ピニエーラとモダニズムの関係に言及しているが、ある時点で対立する2つのうち1つの立場が揚棄されもう1つに移行したという二者択一的な解釈をするよりは、2つの姿勢が複雑かつ微妙に混じり合うのが現代キューバの文学の特徴だと論じた方がいいのではないか。同じく、ピニエーラの断片的で何かが欠如した世界に比べて、確かにカルペンティエルが「全体性」を志向することを認めるとしても、それを特にキューバについての「肯定の詩学」「人間中心主義」と呼ぶのは無理があるのではないか。カストロ体制からの批判を避けるために発表された『春の祭典』の終盤を除けば、カルペンティエル作品で描かれる世界が特別「肯定的」に描かれているとは思えないし（そもそもキューバでないことも多い）、短篇や『バロック協奏曲』におけるアイデンティティの混乱やずらしは、「人間中心主義」よりは「落下」に、そしてオルテガが指摘するモダニズムの「芸術の非人間化」に近いものではないか。

久野氏本来の資質も、決して二項対立に基づく断罪に適してはいないと思われる。カサ・デ・ラス・アメリカスの評価が、カストロ体制の御用機関として批判的に扱われるほぼ全体と、経済のグローバル化・文化の北アメリカ化に抗するものとして肯定的に扱われる最終章で180度変わってしまう無理に対して、デスノエスの『低開発の記憶』が「付録」とされる短篇を加えるか否かで体制支持とも批判とも読める微妙なバランスをもって作られていることを論じた第5章の完成度を比べてみる時、それは明らかである。是非とも氏には単純化した対立による「分かりやすさ」を意識的に避け、むしろ共存と排除、敵対と融合が複雑に機能する場としてキューバの文学を論じるスタンスをとってほしいものである。

(はながた・かずゆき 静岡大学教授)

## 【書評 2】

花方寿行『我らが大地—19世紀イスマノアメリカ文学における  
ナショナル・アイデンティのシンボルとしての自然描写—』

(晃洋書房、2018年)

大楠 栄三

イスマノアメリカを特徴づける自然の一つ、「豊かな森林」をアンドレス・ベリョ（1781-1865）は次のように描写する。

永久なる密林よ、誰が膨大なものども、お前たちの緑の迷宮に住まい、様々な形態と大きさと飾りで自らを誇示するかに見えるものに、名前か数字を付けようなどと思いつくだろうか？ 密なる群集として、セイバ、アカシア、銀梅花が、蔦、葡萄、芝と織り合わさる。枝々は枝々と、幸いなる微風と光を享受せんと競い合い、永遠の戦を行い、根にとっては、大地の懐さえ狭くなる。

「詩神への誘い」(1822)

やはり、同じくアメリカ大陸に特徴的な自然要素である「広大な平原」を、大御所ペリョとの論争で名を高めたサルミエント(1811-1888)は、そこに襲いかかる嵐を題材に描く。

これゆえにアルゼンチン人は、性格的に、生まれながらにして詩人なのだ。そうならずにいられようか、静かで穏やかな午後の最中に、何処からともつかず陰しく黒い雲が立ち上がり、二言交わす間にも空に広がり、突如雷鳴の轟きが旅人を凍えさせる嵐の訪れを告げ、周囲に落ちる二千もの雷の一つを引き寄せてしまうのではないかとこの恐れから、息をも潜めさせる時に？ [……] 幻想のパレットにこれ以上の絵の具があろうか？ 昼を曇らせる闇の塊、蒼ざめ、震える光の塊は、一瞬暗闇を照らし、無限の彼方に広がるパンパを示すが、そこを鮮やかに横切っている稲光は、つまるところ、権力のシンボルである。これらのイメージは深く刻み込まれるべく創られたものである。それ故に、嵐が過ぎ去ると、ガウチョは物哀しく、物思わしく、厳粛になる [……]。

『ファクンド』(1845)

すなわち著者・花方氏は、イスパノアメリカ文学研究といえば「現代」の、結果的に「小説」の研究が主流をなす現状において、忘れ去られた「19世紀前半」の「詩」を分析対象としている。

ただ、タイトルに明らかなように、本書はたんなる文学研究ではない。美学的な変化が、政治的な革命と表裏一体という考えを土台として、クレリーなどの「視覚論」に、フーコー『言葉と物』、サイード『オリエンタリズム』、アンダーソン『想像の共同体』からの馴染みの概念装置をからめて考察を進めていく。とはいっても、上に引用したような詩の緻密な解釈が、本書の強み。学生時代、写真部で活躍したという著者の鋭い感性による解釈にもとづき、新古典主義(非時間的・カタログ的)からロマン主義(時間的・主体的)への視覚的パラダイムシフトを横軸とするなら、スペイン本国やヨーロッパとの断絶意識から、汎アメリカ主義、各国別のネーション意識へと向かうナショナル・アイデンティティの変化を縦軸とする表に、5人のイスパノアメリカ作家——キューバの愛国詩人とも評されるエレディア(1803-1839)から、ペリョ、短編「屠殺場」で有名なエチェベリア(1805-1851)、サルミエント、そしてロマン主義小説『アマリア』で名高いマルモル(1817-1871)まで——の自然描写をマッピングしていく。

第5章まで読み進めた時点では、政治的・言説的な変化が、19世紀前半のイスパノアメリカで「直線的」に起きた、つまり発展段階論的に「進歩」したかのような印象を受ける。が、そこは花方氏、マルモルの分析において言説の「揺れ」を見逃しはしない。むしろ揺れ動きを例証することによって、「先行する言説を援用し、時に批判しながら、常に参照項として利用」する、「ナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然」という「巨大なアーカ



イヴ」が形成されていったことを明らかにするのだ。

19世紀末から20世紀初頭のスペイン小説を専門とする私が、著者に期待するのは、もちろん——本書で取り扱われた「自然描写」が、19世紀後半のイスパノアメリカ「地方小説」でどのように受け継がれていったか、たとえば、ロマン主義的視覚描写を自然主義的リアリズムはいかに打破したのか、という点。今後の研究の発展が待ち遠しい。

最後に、不肖ながら若い研究者諸氏へ——花方氏が半生をかけた本書こそ、分析対象の絞り方にしろ概念装置の使い方にしろ、博士論文の手本、その一章一章は修士論文の手本とすべき研究、とくに作品分析に真摯に取り組む姿勢は是非、做って欲しい。

(おおぐす・えいぞう 明治大学教授)

### 【書評 3】

M<sup>a</sup> Isabel del Val Valdivieso (ed.), *El agua en el imaginario medieval*.

*Los reinos ibéricos en la Baja Edad Media*, Universidad d'Alacant, 2016.

大原 志麻

編者であるマリア・イサベル・デル・バル・バルディビエソは、イサベル 1 世に関する研究で有名な中世史研究者であるが、もう一つの主要テーマである「後期中世における水」についての研究にも 1994 年以来長らく取り組んできている。同テーマに関しては 20 本以上の論文に加え、『中世カスティーリャ諸都市における水：研究に向けての史料』（1998 年）、『中世末期のスペイン諸都市における水の社会的利用』（2002 年）、『中世後期カスティーリャにおける水と権力』（2003 年）、『中世都市において水で生活するという事』（2006 年）、『イスラム教徒とキリスト教徒の水への姿勢』（2009 年）、『中世スペインにおける水と社会』（2012 年）、『修道院と水資源』（2013 年）、そして 2015 年の『中世における水の認識』に引き続いて本刊行してきており、編者のバイタリティーとコーディネート能力に畏敬の念を禁じ得ない。

これまで実証主義による研究を進めてきた編者であるが、2015 年刊行の前作から、文化史的な視点からの研究へと方向性を転換させている。本書はスペイン経済競争省 HAR2012-32264 の助成を受け「中世末期の人々がどのように水を見つめ、表象し、価値を与えてきたかを明らかにすること」という目的の下、内容ごとに三部に分かれた 15 本の論文により構成されている。第一部「現実と認識」では、まずエミリオ・マルティンが中世カディスの湿地や沼地生態系の独特な利用について、狩猟、漁業、農業、林業、製塩の方法から再検討している。ホセ・イグナシオ・サンチェスは、ドウエロ川中流域、エスゲバ、ピスエルガといった河川における橋や建築物の配置を文献資料や遺跡などから明らかにし、水をめぐる風景を再構築している。フランシスコ・サウロ・ロドリゲスは、中世後期のアラゴンにおける灌漑に関連して、現在まで水不足に悩まされる同地における、聖俗の武装抗争について述べている。ファン・アントニオ・プリエトは、カスティーリャの修道院における水の両義性について、宗教儀式や水に関する奇跡、そして牧畜、農業、工業において不可欠なものとしての水、人間に統制できない自然の脅威としての水について対比的に論じながら、その二つの側面は入れかわりやすいものであるとして論じている。このように第一部は、基本的な前提として従来型の実証主義研究に則した論文を収めている。

これに対して第二部「言語、文学、史料」は、本書のオリジナリティーが大いに発揮され

ているところであろう。これまでのバル・バルディビエソの編著書には、ヨーロッパの大学に広く所属する歴史研究者が寄稿していたが、本書は主に編著者と同じバジャドリ大学所属の研究者が執筆者の大半を占めている。しかし言語学、文学など他の研究領域の研究者が同テーマにアプローチすることによって、非常に革新的な内容となっている。メルセデス・アバドとフアン・フランシスコ・ヒメネスはセグラ川における独特の水文化の発展が今日までこの地域にどのように存続しているかについて、またイサベル・マリア・デ・フレイタスは、『アマディス・デ・ガウラ』において主人公に立ちはだかる水や、恋人が出会い語らう川べりなど、水が如何に人間の想像力の豊かな源であったかを多くの図像を用いながら提示している。また高く評価されるべきは、フアン・カルロス・マルティン・セアによるアルフォンソ 10 世期の聖母マリア頌歌において繰り返し水が登場する場面の分析である。ディアナ・ペラスは、婚姻のために海を旅しなければならなかった女性たちを取り上げ、船旅において雷、嵐、危険、恐怖などに直面する王家の女性たちの人間的な側面を照らし出している。コバドンガ・バルダリソは、1402 年の文書でセゴビアの洪水が神による天罰とされていることから、水が軍事的な表現を用いて恐るべき存在として描かれていることを示唆している。フランシスコ・イダルゴは同様の分析をグラナダ戦争について行い、水が敵を溺れさせたり、渇きに悩ませたりする道具であると認識されていたことを示している。川がアジュールであり、戦闘中の中立地帯であった点は、日本と比較しうる論点である。聖書とコーラン、カスティージャとナスル朝グラナダにおける対照的な水認識を明らかにしているところも興味深い

第三部「儀式、感情、信仰」では、ヘルマン・ガメロが中世末期のカスティージャとアラゴンにおける水を用いた王権儀礼と宗教儀礼についてニエト・ソリアの研究の枠組みを用いて紹介している。ホルヘ・レブレロは、洗礼と関連する希望と肯定的側面と、船旅での恐怖や絶望など否定的な側面という水についての両義性について、マンタリテに注目して論じている。マリア・ルス・リオスはスペイン北西部における、異教の神殿がキリスト教教会に転じた場における水をめぐる奇跡について、数多くの事例を提示している。クリスティナ・デ・ラ・ロサとマリア・イサベル・デル・バルは、ウィクリフやフスの影響を受け激しく揺れ動くカトリック教会、フアン 2 世期バジャドリの神学者フアン・デ・トルケマダの祝別された水がどのように用いられたかを、パチカン図書館の史料を用いて論じている。最後のリカ・アムランの論文における、秘跡を無効化するために湯で子どもを「洗礼」させるユダヤ人家族の事例も関心を引く。

本書をみると、編著者の水に関する研究は枯渇するどころか、ますます豊かな広がりを見せている。今後も継続して新たな学際的な視点からの研究に取り組み、歴史研究の幅を広げ、我々に刺激を与え続けて欲しいものである。

(おおはら・しま 静岡大学准教授)

#### 【書評 4】

浅香武和『新スペイン語事始め』（論創社、2018年）

松井 健吾

本書は同著者が2013年に上梓した『スペイン語事始』（同学社）の新訂増補版である。というのも、まず、前著は13の章から成るが、その一つ一つは氏がこれまでさまざまな機会に発表してきた論考であり、それら初出記事を集めてテーマの年代順に並べ、加筆訂正したいいわゆるアンソロジーという位置付けになる。新著は、これに2つの新たな論考と1篇の書き下ろしが加わり（章構成に若干の変更もある）、追記も施され、さらに前著では口絵の18枚に限られていた写真も新著では本文中に多数掲載されているので、新訂増補版になるというわけである。

さて、新著の表題にある「西班牙」の文字には「イスパニヤ」の振り仮名が添えられていて、前著の「はしがき」によれば、「趣きをだして、『イスパニヤ語事始』としたいと思いましたが、一般の読者を考慮して『スペイン語事始』としました」とあることから、また本書には新たに「スペイン語と出会った日本人」という副題が添えられていることから、当初の希望と世間一般における認知度の両方を考慮した結果の表題であることがうかがえる。

前書同様、本書は第一部に「総論」を置き、以降の第二部～第五部には「出会いから江戸末期まで」「明治期」「大正期」「昭和期」の4区分にした年代をそれぞれに配した構成となっている。第二部以降の各章では、その時代ごとにスペイン語教育史における先駆的な人物とこれに関連する書物を取り上げて論じている。本書で新たに加わった論考は、第三部第一章「外務省第一回スペイン留学生・三浦荒次郎」（初出2014年）と第四部第一章『四國對照南米語自在』・海外雄飛会」（初出2016年）の2つ、そして第五部第二章「昭和戦前のスペイン語学習書」が書き下ろしになる。そして〈追記〉として、第三部第二章でエミリオ・ビンダの来日時期に関する新たな調査が、続く第二章で片桐安吉に関する追跡調査が、第四部第一章では主題の海外雄飛会と同じく海外移住の指南役を担った日本力行会に関する調査が報告されている。

「本書は官立の学校における教育史ではなく、民間人によるスペイン語教育の知られざる事実をとりあげたものです」。このように著者自身が前著『スペイン語事始』の書評（*acueducto*, 34号, p. 38）として述べているが、そうしたスペイン語教育史の「遺跡」を発掘するため、埋もれた文献を調査するにあたり氏の「漁書の楽しみと喜びは古本屋巡りにつきます」（「はじめに」より）という言葉に、温故知新の精神が呼び起こされる。折しも今年7月には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録された。新著のジャケットや表表紙には『原マルチノの演述』の扉に描かれているイエズス会章（中の文字はギリシア語でΙΗΣΟΥΣ「イエス」の最初の3文字に由来するモノグラムらしい）がデザインの一部として用いられているが、これは果たして偶然だろうか。一方、前著の表紙を飾るのは「日本におけるスペイン語教育の創始者・ビンダ」の肖像だ（新著ではp. 118に掲載）。ビンダの容貌を伺い知ることのできる唯一の現存資料というこの写真については、「暖かな視線を投げかけている」（p. 119）との言及があるが、昨今の政府主導による有名無実な「教育改革」を目の当たりにするにつけて、むしろ評者にはこうした日本の現状を憂いているように思えてならないのである。

（まつい・けんご 神田外語大学専任講師）

【国際学会報告】

VII Congreso Internacional de Fonética Experimental (CIFE 2017)

(第7回スペイン国際実験音声学会議)

木村 琢也・泉水 浩隆

2017年11月22日から24日までの3日間、マドリードの Universidad Nacional de Educación a Distancia (国立遠隔教育大学) を会場に標記の学会が開催され、筆者ら2名の他、高澤美由紀会員(亜細亜大学)と松本句子会員(慶應義塾大学[当時])が参加した。この学会は1999年にタラゴナで第1回が開催されて以来ほぼ3年に1回のペースで開催されているが、会場は毎回スペイン国内であり、会の名称に Internacional という語が入れられたのは第3回(2005年)からである。そんなこともあり、標題の日本語訳には原語にない「スペイン」の文字を加えておいた。

筆者らは第4回(2008年グラナダ)と第6回(2014年バレンシア)に、いずれも高澤会員、豊丸敦子会員(拓殖大学)、José Joaquín Atria 会員(University College London)と総勢5名で参加したが、これらの2回では5人の連名で1件の共同研究を発表しただけだったのに対し、今回は4人がそれぞれ別個の発表を行い、スペイン語音声学の世界における日本の存在感を少しは示せたのではないかと自負している。木村は「上昇イントネーション下での語彙強勢の知覚: スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者の比較」、泉水は「スペイン語の無強勢語の日本人学習者による発音とスペイン語母語話者によるその知覚: 予備的分析」、高澤氏は「スペイン語の対照焦点の母語話者による知覚と日本人大学生による知覚」、松本氏は「日本人は音素連続 /CCV/ と /CVCV/ をどのように知覚するか」という題目でそれぞれ発表した。図らずも4人とも日本語母語話者スペイン語学習者によるスペイン語発話の知覚を扱ったわけだが、これは私たちが日々接している日本人学生がスペイン語の音声を母語話者と同じようには知覚しておらず、それが彼らのスペイン語でのオーラル・コミュニケーションを難しくする一因になっているという問題意識を4人が共有していたためと考えられる。口頭発表は4つの会場で並行して行なわれ、私たちの発表の聴衆は多いとは言えなかったが、質疑応答は活発に行なわれ、おおむね好意的に受け入れられたと感じている。

口頭発表は全部で99件あり、内容も多岐に亘ったが、近年スペイン語の様々な変種の韻律的な特徴およびその意味的・語用論的機能に関する研究が特に盛んに行われるようになっていくという印象を受けた。また、外国語学習者の音声教育に関するテーマも増えてきているように思われる。韻律的特徴の記述については、AMPER (Atlas Multimédia Prosodique de l'Espace Roman)、ToBI (Tones and Break Indices)、AMH (Análisis Melódico del Habla) いずれかの理論的背景を踏まえている発表が多かった。例えば、Universidad La Laguna の Josefa Dorta 氏らのグループは AMPER の提唱する枠組みに基づき、キューバやベネズエラ、コロンビア、米国テキサス州のスペイン語イントネーションの特徴について分析していた。さらに、他ではあまり聞くことのないロマンス諸語に関する研究の発表もあり、貴重な機会となった。

2日目の午後にはバスで Consejo Superior de Investigaciones Científicas (高等学術研究院) に移動し、「Manual de Pronunciación Española から第7回 CIFE まで: スペインの実験音声学の100年」と題するシンポジウムが行なわれた。Navarro Tomás の古典的著作が出版されてから2018年で100年になることを記念したものである。パネリストとタイトルは「実験的手法の教育への応用: Navarro Tomás の Manual における発音の記述」(María José Albalá 氏)、「Navarro

Tomás の *Manual de pronunciación española* におけるイントネーションの記述」(Juan María Garrido Almiñana 氏)、「外国人へのスペイン語教育における Navarro Tomás」(Carmen Muñiz Cachón 氏)、「音声学と言語教育と音韻論：*Manual de pronunciación española* の発展と影響力」(Estrella Ramírez Quesada 氏)であった。

講演後には、ロルカの歌の披露やカクテル・パーティが行われ、これまでの CIFE で知己となった音声研究者たちと旧交を温めることができた。

(きむら・たくや 清泉女子大学教授, せんすい・ひろたか 南山大学教授)

## 【新刊案内】

2017年6月から2018年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『禁忌の言語態 日本語・英語・スペイン語・ルーマニア語におけるカニバリズム表現への認知言語学的アプローチ』、福森雅史、森山智浩（著）、デザインエッグ社、2017年6月
- 『バロック協奏曲』、アレホ・カルペンティエール（著）、鼓直（訳）、水声社、2017年6月
- 『精霊たちの家 上・下』、イサベル アジェンデ（著）、木村榮一（訳）、河出書房新社、2017年7月
- 『吟遊詩人』、アントニオ ガルシア=グティエレス（著）、稲本健二（訳）、現代企画室、2017年8月
- 『パリに終わりはこない』、エンリーケ・ビラ=マタス（著）、木村榮一（訳）、河出書房新社、2017年8月
- 『ラテンアメリカ怪談集』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス他（著）、鼓直（編）、河出書房新社、2017年9月
- 『チリ夜想曲』、ロベルト・ボラーニョ（著）、野谷文昭（訳）、白水社、2017年9月
- 『密告者』、ファン・ガブリエル・バスケス（著）、服部綾乃、石川隆介（訳）、作品社、2017年9月
- 『スペイン語文法シリーズ 1 発音・文字』、寺崎英樹（著）、大学書林、2017年10月
- 『日本人が知りたいスペイン人の当たり前 スペイン語リーディング』、フリオ・ビジョリア・アパリシオ、エレナ・ポンセ・マリンバルド、マルタ・ソレル・アルマニー、大橋玲子（著）、三修社、2017年10月
- 『語るボルヘス——書物・不死性・時間ほか』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス（著）、木村榮一（訳）、岩波書店、2017年10月
- 『ガラテア』、ミゲル・デ・セルバンテス（著）、本田誠二（訳）、水声社、2017年10月
- 『ラテン・アメリカの旅』、北原靖明（著）、叢文社、2017年10月
- 『ドニャ・バルバラ』、ロムロ・ガジェゴス（著）、寺尾隆吉（訳）、現代企画室、2017年11月
- 『スペイン語文法ライブ講義！』、加藤伸吾（著）、白水社、2017年12月
- 『ペルシーレスとシヒスムンダの冒険』、ミゲル・デ・セルバンテス（著）、荻内勝之（訳）、水声社、2017年12月
- 『圧力とダイヤモンド』、ビルヒリオ・ピニエーラ（著）、山辺弦（訳）、水声社、2017年12月
- 『Eメールのスペイン語』（電子書籍）、四宮瑞枝、廣康好美、ホセファ・ビバンコス、ファン・カルロス・モヤノ（著）、白水社、2018年1月
- 『パルナソ山への旅および詩作品』、ミゲル・デ・セルバンテス（著）、本田誠二（訳）、水声社、2018年1月
- 『マイタの物語』、マリオ・バルガス ジョサ（著）、寺尾隆吉（訳）、水声社、2018年1月
- 『もっと知りたいベラスケス 生涯と作品』、大高保二郎、川瀬佑介（著）、東京美術、2018年1月

- 『情熱の哲学：ウナムーノと「生」の闘い』、執行草舟（監修）、佐々木孝（著）、法政大学出版局、2018年1月
- 『新スペイン語事始め』、浅香武和（著）、論創社、2018年2月
- 『日本人の恋びと』、イサベル・アジェンデ（著）、木村裕美（訳）、河出書房新社、2018年2月
- 『外の世界』、ホルヘ・フランコ（著）、田村さと子（訳）、作品社、2018年2月
- 『娘たちの空返事 他一篇』、モラティン（著）、佐竹謙一（訳）、岩波書店、2018年2月
- 『ぼくを燃やす炎』、マイク・ライトウッド（著）、村岡直子（訳）、サウザンブックス社、2018年2月
- 『バスク地方の歴史 先史時代から現代まで』、マヌエル・モンテロ（著）、萩尾生（訳）、明石書店、2018年2月
- 『夜のみだらな鳥』、ホセ・ドノソ（著）、鼓直（訳）、水声社、2018年2月
- 『ラテンアメリカ傑作短編集〈続〉：中南米スペイン語圏の語り』、野々山真輝帆（編）、彩流社、2018年3月
- 『我らが大地』、花方寿行（著）、晃洋書房、2018年3月
- 『スペイン帝国と複合君主政』、立石博高（編著）、昭和堂、2018年4月
- 『ベラスケスのキリスト』、ミゲル・デ・ウナムーノ・イ・フーゴ（著）、執行草舟（監修・編）、安倍三崎（訳）、法政大学出版局、2018年4月
- 『ボルヘス怪奇譚集』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、アドルフオ・ピオイ＝カサーレス（著）、柳瀬尚紀（訳）、河出書房新社、2018年4月
- 『抒情詩集』、ソル・ファナ・イネス デ・ラ・クルス（著）、中井博康（訳）、現代企画室、2018年4月
- 『スペイン語のしくみ《新版》』（電子書籍）、岡本信照（著）、白水社、2018年5月
- 『燃える平原』（岩波文庫）、ファン・ルルフォ（著）、杉山晃（訳）、岩波書店、2018年5月
- 『ベラスケス 宮廷のなかの革命者』、大高保二郎（著）、岩波書店、2018年5月

**【『HISPÁNICA』編集委員より】**

『HISPÁNICA』第63号の原稿を募集しています。論文・研究ノート・書評を投稿規定に違い、2019年3月1日から31日（31日消印有効）の期間内にご投稿ください。

（送付先）日本イスペインヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1 第2ユニオンビル4F

（株）ガリレオ 学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

**【編集後記】**

今年6月、スペイン議会で国民党ラホイ政権に対する内閣不信任案が可決され、7年ぶりに政権交代をみました。社会労働党サンチェス内閣は、閣僚17人中11人が女性で、その割合はヨーロッパで最多となりました。

今年度、斎藤文子先生が新会長に就任されました。会長には本号の巻頭言をご寄稿いただきました。そこで記されているとおり、2002年以前の大会プログラムが学会ウェブページで新規公開される予定ですが、情報の欠落している年度があります。公開後、不足年度分についてご存知の方は学会の事務局または理事までご一報ください。

（広報委員 青砥清一）